

30分でわかる『明日のハナコ』 の基礎知識

2022年4月29日(金)
文責 当実行委員会

<登場人物紹介>

玉村徹 60歳代男性。

2021年3月まで福井農林高校国語教師・演劇部顧問、
2021年4月から10月まで同校部活動指導員。
前福井県高等学校演劇連盟委員長。

高文連(高校文化連盟) 演劇部会 部会長 A氏

福井県の部会長。県立■■高校の男性校長。この高校の校長に赴任すると、自動的に演劇部会の部会長をひきうけることになる。演劇自体はあまり見たことがない男性。高文連は、演劇祭の運営などに文科省からの助成金を受け取るための窓口機関のような存在。(2022年4月からは別の人物に交代しました)

高演連(高校演劇連盟)委員長 B氏

福井県の委員長。県立XX高校の顧問教員。国語教師。玉村徹があとを託した、顧問会議のリーダーの役割。演劇の脚本も書き、熱心に演出・演技の指導もする女性。高演連は、演劇祭などの主催団体名。実際は顧問会議がその内容を決定している。

顧問会議の教員たち

福井県内の高校には、現在公立・私立あわせて13の演劇部がある。各校に正顧問、副顧問2名の顧問教師がいる。多くは国語教師。各校1名ずつ、13人の顧問教員が集まるとそこが「顧問会議」となる。高校生たちの演劇祭、研修会をどうするかなどについての最高決定機関。演劇を熱心に指導する人や、多忙なのでほぼ演劇に労力を払わない人や、男性や女性、ベテランや若手ら、多様な教員のあつまり。

<ハナコ年表>

2021年

9月18日～20日

第75回福井県高校演劇祭が開催されました。これは福井県の高校演劇部の県大会に当たるものでしたが、コロナのせいで無観客上演になりました。観客席にいたのは審査員と生徒代表の15人だけ。演劇は「誰かに伝えるもの」ですから、相手がいないと意味がありません。まるで集団面接。そのうえ部員たちは自校の上演後は退館しなくてはならなかったため、他校の劇を見ることもできませんでした。もちろん保護者もダメ。だから12月に「ケーブルテレビ」で放映されるのを、誰もが本当に楽しみにしていました。

19日(日)

福井農林高校「明日のハナコ」(作・玉村徹)上演。その直後、「福井ケーブルテレビ」のクルーより、小島委員長に次のような連絡がありました。

・「明日のハナコ」は、放映に際して問題があるかもしれないので、社内で審議する。

・理由は、原発という微妙な問題を扱っていること、特定の個人の名前を挙げて批判していること、差別用語が使われていること。

20日(月)

演劇祭終了後の「顧問会議」で審議が行われます。その結果、
結論＝顧問会議としては、「明日のハナコ」の放映をケーブルテレビに要請することはしない。ケーブルテレビの判断に任せる。

テレビ放映されたとき、原発や個人を特定するところや差別表現が、なんらかの批判を招き、劇を作った福井農林高校演劇部の生徒が傷つくかもしれないから、というのが理由だそうです。(だそうです、というのは、はっきりしたことがわからないからです。顧問会議の議事録が公開されていないのです。この「議事録が公開されない」あるいは「記録が残されていない」というのは、今回の事件でしばしば現れる特徴の一つです。)

しかし、この結論には二つ問題があります。第一に、先生方が、福井農林高校の劇に対して、とても「つめたい」ということです。もし、テレビ放映がされなかったとしたら、そのとき福井農林高校の演劇部員の生徒が感じる悲しみを、先生方は本当に想像したのか、ということです。今回の演劇祭は無観客上演でした。生徒たちの演劇は、テレ

ビ放映されなければ誰にも伝わりません。一生懸命稽古して作り上げた舞台が「なかったもの」にされることのつらさを、先生方が本当にわかっていたのか、ということです。

もちろん、『明日のハナコ』を放映した場合、生徒が傷つくということが確かなことであるなら、先生方の心配もわかります。しかし、先生方はこの劇を本当に精査してこの結論を出したのか。これが第二の問題です。

たとえば、この会議の中で演劇部会の部会長が次のような発言をしていることが複数の先生方の証言で明らかになっています。

「ケーブルテレビもスポンサーに原発関連企業を抱えているだろうから、みなさん大人の判断をお願いします。これからもケーブルテレビとはいい関係を保っていききたいですから。」

ケーブルテレビ側が何か言ってくる前に、その意向を先回りして行動しようと言っているわけです。こういうのを「付度」といいます。部会長は「付度すること」が「大人の態度である」と明言したわけですが。あとになって、部会長は「雑談の中で出た言葉だから、そこだけを取り上げて批判するのは、真実をねじ曲げている」などと、どこかの政治家のような言い訳をしています。しかし大人なら言うてはいけない言葉があると思います。また、そもそも福井農林高校の演劇部員たちが一生懸命作った劇について論じる場で「雑談」をしていいはずがありません。

また次のような発言もありました。これは部会長の発言のあと、ある演劇部顧問から出ました。

「高文連も原発からお金をもらってますもんね」

たしかに「高文連は原発からお金をもらって」います。公開されている資料によると福井県高等学校文化連盟は「げんでんふれあい福井財団」から年間六〇万円の助成金をもらっています。しかし、お金をもらったから、その団体について特別に便宜を図るべきだというのは間違っています。

補助金は、活動の思想的方向や表現内容についてなんら干渉するものではないし、これまでも干渉した例はないはずですが。そういう性質の支援であるからこそ、公的な組織が(高文連は県の組織です)公明正大に受け取ることができるのです。

もしも干渉があって、内容を規制しなければならないようなものであれば、それも意見の一方を否定するようなものであれば、そのような助成を受け取っている県が裁かれる事態になってしまうし、即刻県はその助成を返上すべきだというのが、行政上の通念だと思われます。

学校の先生は、時代劇の悪代官ではないので、商人から賄賂をもらってその言いなりになる、なんてことがあっていいはずがありません。だからこの発言は間違っている上に、先生方を悪代官並みに扱って侮辱した発言です。

そして実は、もっと深刻な問題は、この発言者が『明日のハナコ』をちゃんと見ていなかったということです。

『明日のハナコ』の終盤に、こんなセリフがあります。

小夜子 この演劇祭だって、原発からのお金がナンボか流れ込んでるんですよ。あたしたち原発のおかげで劇がやれてるんです。これって馬鹿みたいですよ。ね。

すでに劇中で、助成金のことは述べられていました。なのに、こういう発言が顧問会議の席上で出る。しかも、そのことを指摘する声(「あ、それ、劇の中で言ってたよ」)がなかった。つまり、他の先生方の中にも劇を見ていない人が少なからずいた。

つまりこの顧問会議は、「雑談」のようであったり「劇をまともに見ていない」のに討議したりした会議であったということです。『明日のハナコ』という劇について、先生方が十分に議論したのか、ちゃんと考えたのか、はなはだ疑問であると思います。

先生方の多くは「たかがケーブルテレビの放映くらい」と考えていたのでしょうか。けれども、無観客上演という異常事態の中で、ケーブルテレビでの放映が、生徒たちにとってどれほど大きな意味を持っているか、わかっていません。他の学校の上演は放映されるなかで、福井農林高校の劇だけが排除されるということになった場合、それがどれほど生徒たちの心を傷つけるか、考えていません。要するに、劇を作る人間の気持ちがあわかっていない。それは、演劇部の顧問としては、致命的な欠落であると思います。

それでも一部の顧問の先生の中には、「これは福井農林の生徒たちの作った劇だから、彼らの意見も聞くべきだ」という発言があったそうです。これは全く正論だと思えます。

21日(火)放課後

玉村は福井農林高校演劇部の部員に顧問会議の結論を伝達しました。生徒たちの意見は次のようなものでした。

「自分たちは一生懸命稽古してきた。是非放映してほしい。」
「どんな批判が来るのかわからなくて不安だけど、この劇が間違っているとは思わない。放送できないって、納得できない。」
「この劇で演技賞をもらった。とても嬉しい気持ちだったのに、台無しにされた気分だ」
泣いている生徒もいました。

22日(水)

部員たちの意見を踏まえて、玉村は顧問の先生方にメールを送り、ケーブルテレビでの放映を要望しました。

・特定の個人批判も差別用語も、公式のメディア(市立図書館の本)から引用したもの。これが問題なら図書館を閉鎖しなくちゃいけない。
・原発やその関連企業に付度するなんて、教師の言うことではない。
・顧問会議に、生徒や玉村の参加を認めてほしい。直接意見を言う場を与えてほしい。

顧問会議からはまったく反応がありませんでした。もちろん生徒や私に対する事情聴取もなかったし、直接意見を言う機会も与えられませんでした。「コミュニケーションができない」というのも、今回の事件の特徴です。

10月8日(金)

2回目の顧問会議。ここで、仰天の結論が出ます。

結論＝福井農林高校の劇はケーブルテレビで放映しない。
映像は残さない。
脚本はすべて回収する。

これらは「スクールロイヤーの助言」をその根拠としているようです。それによれば、

- 1 反原発の主張は、表現の自由が保障されるので問題ではない。
- 2 「かたわ」という言葉は差別用語で、使用するだけで駄目であり、批判が避けられない。生徒や学校が傷つけられる可能性が高い。

「抗議の電話が福井農林高校にかかってきた場合、その対応に福井農林高校の職員は忙殺され、本来の業務に差し支えることもあり得る。この場合、職務に対する妨害行為ということになる。また、生徒たちがネットなどで責められ、傷つく可能性もある。私たち大人は、学校や生徒を守らなければならない」というのです。

福井県教育委員会によれば、スクールロイヤーとは、以下のようなものです。

「福井県内の公立小中学校および県立学校において発生した、各学校だけでは対応困難な児童・生徒に関する法的課題に対して、弁護士による適切な法的助言等が受けられる機会を設ける。」
「担当弁護士の事務所での面接相談(1回1時間)を原則とする。」
「相談概要書を提出する前に、必ず県教委に相談する。」
「スクールロイヤーは、常に児童・生徒の最善の利益を図る立場で助言をし、公立学校が行うべき法律上適切な対応を指導・助言する役割を担う。」

ただし、この「スクールロイヤーの助言」には不審な点があります。

顧問会議では「助言」が文書で示されたそうですが、これが会議中にすべて回収されていて顧問の先生でさえ保存していません。だからどういう助言であったのか精査しようとしてもできません。どうして回収する必要があったのか。そして、どうしていまだに公開されないのか。

想像することはできます。実は、この助言に法律的な根拠がなかったからではないか。ちょうど、サスペンスドラマなんかで、ニセ刑事がちらりと黒い手帳を見せて、自分が刑事であるかのように見せかける、あの場面です。そんなふうはこの「助言」はちらつかされたのではないか。根拠の薄弱な内容だったが、法律的な根拠があるかのように見せかけたのではないか。

これがスクールロイヤーが指示したことなのか、それとも部会長たちがスクールロイヤーの助言をねじ曲げて利用したのか、それはわかりません。ただ、そのせいで、顧問の先生方がきちんと討論する機会が失われてしまいました。それぞれが自分の考えを持ち寄って考えを深める機会が失われてしまいました。「万機公論によって決すべし」が民主主義の基本のはずです。でも、それは行われませんでした。そして、福井農林高校の演劇部員たちの声が汲み取られる機会も失われてしまったのです。

私は、10月12日に、この結論を福井農林高校の校長から伝達されました。このときは、「顧問会議の結論」さえも文書としては示さ

れませんでした。あくまでも口頭で伝える、の一点張りでした。校長先生は部会長からもらったらしい文書を手に持っておられました。けれども、これは見せないようにと言われていたのだと、と。言いながら校長先生もおかしいと思ったのでしよう、部会長に電話して確認してくれました。そうしたら部会長は「見せないように」と指示しました。

私は、文書を示さないという方針は、顧問会議で決定されたのですか、と尋ねました。先生方が全員で審議した結果であるなら、我慢しようと思ったのです。それも民主主義だと思いました。この時点で、私は顧問会議の議論が、まさかそんなふうになじ曲げられているとは知りませんでしたから。すると、その場に立ち会っていた福井農林高校の演劇部顧問の先生は「そうです。顧問会議でそのように決定しました」と答えました。

これは全くの嘘でした。後日、他の顧問の先生に確認したところ、顧問会議ではそのような決定はしていませんでした。むしろ、玉村に文書で知らせた方がいい、という意見すらあったそうです。

文書がなければ、精査される心配がありません。スクールロイヤーの助言も、顧問会議の結論も、「そんなことは言っていない」「記憶にない」といくらでも言い逃れることができます。事実、あとになって部会長たちは「放映しない、なんて言っていない」「ケーブルテレビには懸念を伝えただけだ」と言葉をひるがえしています。

これは異様なことです。学校教育の現場で、こういうずるい手法が何度も使われるのは、かなり珍しいことです。

そしてなにより、尊敬すべき先生方が、そんな不誠実な行動をすることが、今でも信じられない気がします。生徒に寄り添うはずの先生が嘘をつくというのは、本当に悲しいことだと思います。

先生方が恐れる気持ちはわかります。「差別表現があるために生徒が傷つけられるかもしれない」から、「ネットでバッシングされるかもしれないから」というのもわかります。学校は生徒を守らなければなりません。教員は生徒の安全に責任を持たなければなりません。

しかし、それは、危険が「確実に」存在する場合です。

たとえば、生徒が列車のホームから落ちるかも知れないからという理由で修学旅行を中止したらどうでしょう。捻挫するかも知れないという理由で体育の授業を取りやめたらどうでしょう。

予想されるリスク＝危険の起こる確率があまりに小さい場合は、リターン＝利益の大きさを優先して実行するのが、学校でもふつうのことです。表現の自由を生徒が享受する利益。ネットでバッシングされる危険。この大小の関係は、中立的な視点から検討すれば明白です。表現の自由という人権を制限するほどの危険の確率はなかった。これが事実です。

先生方は、安全な道を選びます。生徒がケガをしないように、あとから「教師は何をしていたんだ」と非難されないように、なるべく危険の少ない道を進もうとします。だから「生徒を守るために、『明日のハナコ』を排除する」ということになってしまう。生徒を守ると言いながら生徒を傷つけるという変なことになってしまう。

生徒を守る、というのは美しい理想です。しかし生徒を守るといながらも、生徒の表現を守ろうとしないなら、生徒の可能性を守ろうとはしないなら、生徒の夢を守ろうとはしないなら、それは問題です。そして、表現することは危険だからやめなさい、と指導するなら、おとなしくしていること、何もしていないことがよいことである、と教えるなら、それは結果として「空気を読む」という態度を育てることになります。集団から浮かないように過ごす生き方を育てることになります。「正しいか正しくないか」ではなく、その「集団の中で協調し、傷つかずに生きる方が大事だ」という態度を育てることになります。「付度する」大人たちは「付度する」子供たちを育ててしまします。

だから、先生方が本当に討論して考えるべきだったことは、『明日のハナコ』という劇の中に、問題とすべきものがあつたのかどうか、です。差別意識があつたのか、原発を取り上げたことはどうか、個人を批判したことはどうか、そもそもこの劇はどのような劇だったのか、きちんと見て、考えるべきだったのです。

「明日のハナコ」を上演したとき、それを実際に見ていたのは、3人の審査員と13人の生徒代表たち、あとは舞台袖にいた数人の顧問たちだけでした。生徒代表たちから批判の言葉は出ていません。舞台袖の先生方からも同じです。「ハナコ」を演じた生徒は「演技賞」をもらっています。これは、普通の人たちは「ハナコ」見てもそこに差別意識を感じないということの証明だと思います。

そこで、私は鈴江俊郎氏に意見を仰ぎました。鈴江氏は、福井県高校演劇祭の審査員や研修会の講師を何度も務めていた人です。ここ数年は、創作脚本講座を担当してくれています。福井県の劇についても

顧問の先生方についてもよく事情を知っています。

相談してまず鈴江氏が言ったことは「差別用語というものは、使っただけで駄目などということはない」「こんなことがまかりとあるというのは表現の自由の危機である」ということでした。

私は鈴江氏の言葉に勇気もらって、スクールロイヤーの助言が本当に法的に正しいのか、別の法律家の意見を仰ぐことにしました。ある弁護士は次のように言いました。

「カタワというのは高木市長の発言のことでしょ。あの発言はみなよく覚えてます。しかし、その単語を使用したからすなわち違法であるという判断は、法律家としては考えにくいですね。もし、この劇が前敦賀市長と同じ立場に立って障害者を差別したのであれば問題だけれど、反原発の立場から批判的にこの言葉を述べている以上、そこに差別意識はないでしょう。また、前敦賀市長も北野たけしも公人であるから、特定の個人を非難したという批判も当たりません。前市長の家族が名誉棄損で訴えてくるなどということも起こりえないですね。」

「そもそも顧問会議にケーブルテレビの放映の是非を決める権限はありません。表現の自由は基本的人権の一つであり尊重されるべきものです。先生方は基本的人権についてあまりに無知だと思いますね。たとえば変な校則ってあるでしょう。服装違反とか。あれに法的な根拠ってあると思いますか。ないんですよ。先生方はそういうことについての意識がないから、簡単に人権を無視してしまうんです。」

さらに別に2名の弁護士に相談しましたが、ほぼ同じ回答でした。「どうしてもというなら、断りのテロップを入れるなり、音声を加工するなりすれば放映は可能はず」という意見でした。

それでは、どうして『ハナコ』は排除されたのか。

いくつか想像することはできます。

ケーブルテレビが示した問題点のうち、差別も個人を特定しているところも法的に問題でないならば、残るのは原発問題です。もちろん原発を批判的に描くことも法的には問題ありません。けれども、それに付度しようとする人たちが、福井県には存在するのかもしれない。福井県は、原発があることによって経済的な利益を得ている県ですから。

また、ある顧問の先生に言われたことがあります。原発についてその問題点を批判するだけでなく、そのよいところも描いて、どちらにも理屈がある、結論は見ているお客さんに任せます、そういう形にしたらよかったですのではないかと。『ハナコ』は「公平さ」に欠けていたのではないかと。「政治的中立性」を欠いていたのではないかと。

これに対してはこう答えます。

学校でイジメがあったとします。それを劇にするとします。そのとき、いじめた方といじめられた方、どちらにも理屈があるので、結論はお客さんに任せます、という劇を作ったとしたらどうでしょうか。

「いじめっ子も悪いけれど、いじめられる方だって悪いところがあるんだよ」という劇を作ったらどうでしょうか。それは「公平な」劇でしょうか。

そんな劇を作る人は、いじめられることの苦しさを全く理解していないと思います。学校どころか自分の部屋の外にも出られなくなった人間の気持ちや、いっそ死んでしまったら楽になるだろうと思ってしまう人間の気持ちがわかっていません。

これは「戦争について」でも「貧困について」でも「人種差別について」でも同じことです。これらのテーマで「公平な」劇というものを想像してみてください。

演劇は「公平」ではないかもしれませんが、一つ一つの演劇は偏っているかもしれません。しかし、たくさんの表現が行われる中で、総体的に「公平さ」は保たれていくものです。どうしても「公平さ」を求める人は、原発を賛美する劇を作ってください。さまざまな劇があっただけいいけれど、一つ一つの劇に「公平さ」を求めることは、表現に制限を加えるのと同じことになります。

前述の顧問の先生が言う「公平な」劇というのは、誰にも非難されない劇のことです。誰からも文句を付けられない劇のことです。そういう劇を求めるのは、つまるところ、集団から浮かないようにしよう、という気持ちの表れだと思います。みんなと同じことをしよう、目を付けられないようにしよう。何が正しいのか、ではなく、この集団では何が求められているのか、この集団ではどんなふるまいをしたら損をしないで済むか、を優先する気持ちの表れだと思います。そういう態度の先に、保身と付度が生まれます。

「ハナコ」が「公平な」劇ではないと感じるのは、「原発問題に対しては意見を言う」と浮いてしまう「損をする」という気持ちがある

からではないでしょうか。原発について付度する意識があるということではないでしょうか。だから「ハナコ」は排除されなければならないなかったのかもしれない。

もう一つ、こういう想像もできます。あえて根拠薄弱な差別表現のことを強調して『ハナコ』を排除したのは、やはり原発問題に触れられなくなかったからである。しかし、その理由は個人的なもので、「ケーブルテレビもスポンサーに原発関連企業を抱えているだろうから、みなさん大人の判断をお願いします」という問題発言をなかつたことにしたかったからではないか。原発問題に焦点が当たれば、どうしてもこの発言が表面化する。そうなったら当の発言者である部長にとっては具合が悪い。だから差別問題というところに問題をずらした。

事実、部長はその後、いくつか矛盾した発言をしています。「記憶にない」はもちろんです、「9月20日の顧問会議は顧問会議ではない」とか、「顧問会議は10月8日だけである。だから9月20日に出た発言はすべて無効である」とか。なぜ、島田部長が9月20日の顧問会議をなかつたことにしたいのか。それはそうすることで、この発言を消去できるからです。

立派な地位のある人が保身に走るというのは信じがたいのですが、むしろ立派な地位にあるからこそ、そういうこともあるかも知れないと思います。

なお、この顧問会議のあと、演劇連盟の委員長は、演劇連盟事務局の先生を通じてケーブルテレビに、「福井農林の劇はなかったという形で放送してください」と伝えていたようです。これを受けて、ケーブルテレビは『明日のハナコ』の放映中止を決定しました。

23日(土)

「福井の高校演劇から表現の自由を失わせないための『明日のハナコ』上演実行委員会」が結成されました。趣旨に賛同してくれた顧問の先生方数名と鈴江俊郎氏と玉村徹がメンバーです。

会の目標としては、10月8日の顧問会議の結論の撤回させること、その方法としては、署名運動と、『明日のハナコ』の上演会を考えました。差別表現や原発問題についてより理解を深めるためには、劇を見るのが一番だからです。さらに専門家の講師を呼んで、劇を見たあとお客さんとともに話し合いの時間を持つことも考えました。さまざまな意見が交換されることで、知識や理解は豊かになっていくはずだから。

10月いっぱい、玉村は部活指導員の職を辞しました。福井農林高校演劇部の生徒に事情を説明しました。自分は学校を離れた活動をする。みんなのために、「明日のハナコ」のための活動をするが、みんなはみんなで頑張ってもらいたい、と伝えました。部員たちと別れることは残念でしたが、これは、「玉村が部員たちを操っている」という非難を避けるためでもありました。部活動の指導を長くやっていると、顧問が部員たちを支配しているのではないかと、生徒を操り人形にしているのではないかと、と勘ぐられることがあります。演劇は、誰かが誰かを支配してできるようなものではないのですが。

27日(水)

助言を実際にしたというスクールロイヤーの弁護士を探し当てました。顧問会議で示された「助言」の文書に名前は書いてあったのですが、回収されてしまって名前さえもわからなかったのです。さっそく電話して事情を尋ねました。

玉村 「明日のハナコ」のことですが、顧問会議ではどのような助言をされたんでしょうか。

■■ 顧客とのことはお話しできません。不満があるなら教育委員会でも顧問会議でも相手にして裁判を起こされたらどうですか。

玉村 「他の弁護士の方にも伺ったんですが、どなたもこういう場合は差別にはあたらないと言うのですが、それについてはどのような、」

■■ 「だから不満があるなら、裁判でも起こしたらどうですか。」

玉村 「あ、あの、」

■■ 「仕事があるのでこれで。」

顧客のこと、つまり演劇部会や教育委員会のことだと思いますが、それについて話ができないのはその通りだと思います。ただ、差別表現についての法的見解くらいは教えてもらえるかと思っただけです。甘かったようです。

加えて、人権を制限するこのような決定に大きな影響を与える助言

をした国家資格の弁護士は、人権保証の観点から、公的にその根拠や経緯を説明する義務があると私は考えます。人権を保障することが第一の責務であるのが、この「弁護士」という国家資格なのですから。

1 1月1日(月)

要望書を部会長と委員長に提出に提出しました。

- ・顧問会の結論の撤回
- ・福井農林高校演劇部員への謝罪
- ・今後演劇表現の内容に理不尽な介入をしないこと
- ・人権侵害を行ったことへの真摯な反省

部会長に対しては、およそ30分、対面で説明しました。そして、1週間以内になんらかの返答をください、とお願いしました。

部会長「一週間では無理だ、顧問会議を開くにも、先生方は忙しいし、生徒の学習に差し障りがあるとはいけない、教員はまず生徒のことを考えなければならないから」

玉村「それではどれほど時間があつたらいいのか」

部会長「3ヶ月くらい」

玉村「3ヶ月もしたらケーブルテレビの放映も終わってしまっています(このとき、もうケーブルテレビが放映中止を決めたことを玉村は知りませんでした)。会議についてはズームなどいろいろ方法はあるはず。1週間で返事をください。」

「教員は生徒のことを考えなければならない」と言いつつ、福井農林高校の演劇部員の切実な問題については考慮しないのは、とても残念なことだと思います。

同じ要望書をすべての演劇部顧問にメールで送りました。この問題を顧問の先生方が共有し、考えてもらいたいと思ったからです。だから要望書の相手はあえて「顧問会議」としました。

福井県高等学校演劇連盟にはこのような規約があります。

「顧問会議は加盟校顧問教諭で構成し、この連盟の最高決議機関とする。」

顧問会議は、本来は、演劇顧問の先生方が集まって討論しつつ、さまざまな決定を下していく、民主的な組織の決議機関です。だから、どんな結論を出すにしてもきちんと議論して決めてほしい。スクールロイヤーの助言にひれ伏すのではなく、部会長の考えに迎合するのではなく、一人一人が調べて考えて自分の意見を持って討論してほしい。それは「ハナコ」だけの問題ではなくて、演劇だけの問題ではなくて、先生方がどんな教育活動をしていくかということに関わってくる問題だと思うからです。

学校の中では、次第に民主的な活動がなくなりつつあります。一人一人の教員が考え、それをみんなで討論して一つの方針を作り、学校全体で実行していく、というようなことはほとんどなくなりつつあります。たとえば職員会議がもうありません。かつては「議長」がいましたが、いまは「司会」です。先生方は討論しますが、決をとることは許されていません。最後に決定するのは校長です。つまり、極端なことを言えば、討論はなくてもいいのです。先生方には決定権はないのです。

もちろん民間の会社では、これは普通のことでしょう。社長なり部長なり、上司が命令して部下がそれを実行する。会議はあるけれども、決定権はあくまでも上司にある。会社の方針を社員の多数決で決める、などということはありません。

しかし、学校は社員を養成する場所ではありません。民主主義国家の成員を育成する場所です。その育成を担っている教員が、実は民主的の制度の中にいないのです。民主的態度を持ってないのです。これは問題ではないでしょうか。民主的の制度の中にいない教員が民主的の態度とは何かを知っているのでしょうか。それを生徒に教えられますでしょうか。現に、生徒たちは、学校の中でどれほど民主的な行動ができていますでしょうか。

部活動はそのなかでも数少ない民主的な活動の場です。生徒は自主的に活動します。演劇部であれば、脚本を書き、稽古し、装置や衣装を作り、舞台上がります。誰かに強制されてできるものではありません。嫌がる部員を無理矢理ステージにあげることはできないからです。演劇は支配されてもできるものではないのです。

顧問会議は、民主的な組織であると明記されています。顧問の先生方が決議するものだと書かれています。だから、顧問会議には期待するところが大きかったのです。

9日(火)

しかし、一週間経っても顧問会議を開かれる様子はありませんでした。また連絡もありませんでした。

あとでわかったことですが、この間、委員長から各学校の顧問の先生

に対して「県と部会長が対応を協議しているから、先生方は落ち着いた対応をしてください」というメールが出されています。残念なメールです。顧問の先生方の意見を聞くつもりはない。顧問会議を開くつもりはない。上の方で対応を決めるから、顧問は何もしないでいるように。そういう意味だと思います。

そしてもっと残念だったのは、このメールに対して、「顧問会議をしましょう」という顧問の先生がいなかったことです。民主的な行動をする先生方がいなかったことです。部会長や委員長の判断を待ち、それに従い、支配されるだけの先生方が多かったということです。

1週間経って、やむを得ず、二つの活動を始めました。一つは署名運動です。もう一つは、大人による『明日のハナコ』上演会+学習会の準備です。

署名活動は、最初は紙の署名用紙を福井駅で配布したのですが、心が折れるばかりでなかなか成果はありませんでした。道行く人は、高校演劇について、なかなか関心を持ってくれません。返信用封筒をつけて各学校にも配布しましたがまったく反応なし。行き詰まったところに、オンライン署名というものがあると聞き、そちらも試してみることにしました。

上演会+学習会については、とにかく『ハナコ』を上演してみよう、そしてみんなに見てもらおう、そのあとお客さんも交えてみんなで差別について考えよう、そういうところから始まりました。演劇は実際に見てもらわないとわからないものです。顧問会議の決定のせいで、『ハナコ』は映像も脚本も見ることができなくなっていました。それでは差別なのかどうか検証することもできません。

そこでネット上に「ハナコ」の脚本を公開しました。炎上するかも、と思いました。でも、これが差別であるという反応は返ってきませんでした。むしろ、「どこが差別なのかわからない」「福井農林高校の演劇部のみなさんを支援します」というコメントをたくさんもらいました。

ただ残念なことに、福井農林高校演劇部の生徒に上演してもらうことはできませんでした。理由はいろいろありますが、一番は学校の許可が下りなかったからです。

部会長や委員長から連絡は全くありませんでした。しかし、彼らも活発に動き回っていました。

顧問の中から実行委員会に参加している先生を探しました。魔女狩りのようなものです。そしてその先生がいる学校に自ら足を運び、その校長に話をしました。どんな話をしたかはわかりませんが、そのあとで先生は校長に呼び出され、実行委員会から脱会することになりました。あとからその先生に話を聞いたのですが、「個人の活動についてどうこう言うつもりはないが、学校に迷惑がかかるような活動はやめてくれ」と言われたそうです。どうしてこの活動が学校に迷惑をかけることになるのかわかりません。また、こちらの要望を真剣に受け止めもせず、顧問会議を招集する努力もしないくせに、実行委員会を切り崩すことには精を出す部会長については、まったく残念というほかありません。

少しずつオンライン署名が増え始め、Twitter などネットにも波及し、それが新聞などのマスメディアの注意を惹くことになります。

17日(水)

各新聞、メディアに取り上げられます。

新聞社がさまざまな方法で取材を始めます。部会長のところにも新聞社が取材に行ったようですが、そこでこの人は筋の通らない発言をし始めます。

部会長「大人の判断を、と言ったかどうか記憶にない。」

これについては証人がいます。けれども9月20日の顧問会議の議事録は公開されていないので、いくらでも嘘がつけるわけです。そして、世間は「校長先生が嘘をつく」とは普通思わない。普通の校長は嘘をつかないからです。部会長は、多くの普通の校長先生が長年にわたって積み上げてきた確かな評判をずるく利用したということになります。

部会長「ケーブルテレビに、福井農林の劇はなかった形で、などとは伝えていない。放映の是非はケーブルテレビの判断に任せた。」

これは10月8日の顧問会議の結論と真っ向から食い違います。

また、ケーブルテレビ側は顧問会議の代表者は「今年福井農林の劇はなかった、という形で放送してください、と言われた」と証言しています。

このように部会長が発言をひるがえしたのは、責任逃れ、あるいは

保身だと思えます。ネットで騒ぎになった。新聞でも報道された。その多くは福井農林高校演劇部に同情的であり、顧問会議の決定は行きすぎである、としている。このままでは自分たちが悪者になる。責められる。だったらすべての責任をケーブルテレビに押しつけてしまえ。

部会長は、何が正しいのか、正しくないのか、ということには関心がないようです。「ハナコ」には差別表現がある、だから放映は駄目なんだ、というならそれを押し通したらいい。反対に差別でないと考え直したのなら、福井農林高校演劇部の生徒に「すまなかった」と謝罪して映像を解禁したらいい。それが生徒の手本となる教育者の態度です。けれども、部会長は自分が責められないようにすることしか考えようとしません。

ただし、こういうことも考えられます。顧問会議の先生方が責められないように、責任を追及されないように、つまり、顧問の先生方全体を守ったのだ、と。これはこれで麗しい話かもしれませんが。部会長は嘘までついて先生方を守ったのだ。なんて立派な先生でしょう。

もちろんそんなふうにはなりません。その場合は、顧問の先生みんなが嘘をついたことになってしまいます。先生方みんなが、自分たちが責められないように、ケーブルテレビに責任をなすりつけたことになるのです。そして生徒を苦しめたこととなります。

そして、とても残念なことですが、このときも、顧問の先生方は「部会長は間違っている、顧問会議ではちゃんと決めたはずだ」と声を上げることはありませんでした。この発言は新聞で報道されましたから、先生方が全く知らないとは考えにくいと思います。黙認したのです。それでも先生方は自分たちの顔に泥を塗られたことに気がつかなかったのです。

部会長「9/20に顧問会議はしていない。だからあそこで出た発言はすべて無効だ」

これは「大人の発言を」という自分の言葉をなかつたことにしたいからではないかと思えます。

部会長「差別表現の部分をカットして放映することもできたが、玉村がどうしてもその箇所にこだわったのでできなくなった」

これは悪質な嘘であり、責任逃れです。当初から玉村は、放映に際してはどうしてもということであれば「その部分だけ音声カット」をしてもいいと、自分から提案していました。ところがこれに対して部会長自身が「音を伏せると、かえってその部分にフォーカスされると思った」と反対したことを、新聞の取材に答えています。(朝日新聞11/28) 自分にまで嘘はつかないでほしいものです。

部会長「玉村は無用の騒ぎを起こしてカンパ金を集めている、これは詐欺行為だ」

確かにカンパを募っています。しかし、それが詐欺に当たるはずはありません。またこの活動を「無用の騒ぎ」と断じるのは、カンパしてくださった方々の気持ちを踏みにじることだと思います。

学校を退職して骨身にしみたことですが、署名活動にも劇を上演するにも、お金がかかります。学校にいれば印刷は無料でできます。演劇部の大会で使用するホールの使用料も無料です。けれども一民間人になるとそのすべてを、何十万というお金を自分で支払わなくてはなりません。だからカンパは本当にありがたいものなのです。

30日(火)

福井新聞に突然、記事が載ります。

「高文連演劇部会」は、12月9日(木)に顧問・生徒を集めて表現の自由や人権についての学習会を行い、そのうち「明日のハナコの映像と脚本を県内の演劇関係者に限り限定的に解禁することにした」

これは私たちの活動としては、一歩前進です。「ハナコ」の封印は、部分的には解けたわけですから。

しかし大きな問題があります。それはこの方針転換が顧問会議によって決められたものではなかつたのです。顧問の先生方は新聞記事で初めてこのことを知りました。部会長と委員長が勝手に決めたものです。民主的な手続きを経たものではなかつたのです。

また、この日は期末考査中の学校や修学旅行中の学校もあり、顧問の中からは別の日を検討してほしいという声も上がったそうです。けれども、部会長は学習会をこの日に強行しました。「先生方は忙しいし、生徒の学習に差し障りがあるとはいけない、教員はまず生徒のことを考えなければならぬから」という自分の言葉を部会長はどう考えているのでしょうか。自分の言葉さえ自分の都合で変更可能であるようです。

12月1日(水)

玉村は顧問会議宛にメールで、この学習会に参加させてほしいと要望しました。「今回のこと一番の当事者は玉村なんだから。『ハナコ』にも差別表現があるなら、玉村こそを学習会に参加させなくてはいけないはず。よって、玉村が参加することが問題を解決する早道だと思う。」

しかし、これまた返事は全くありませんでした。

9日(木)

福井県立丸岡高校で学習会が開催されました。ただし、その内容は『明日のハナコ』については全く触れず、「表現は人権に配慮するように」という一般的なものでした。

研修会后、新聞記者が「なぜ『ハナコ』について触れなかつたのか尋ねると、「最初は基礎的なところから、と考えた。次回は検討するかもしれない」。

その後、大会本部が記録していた映像と、脚本集が他校の生徒にも見られるようになりました。ただし、ケーブルテレビの放映はしないという方針に変更はありませんでした。「それはケーブルテレビの問題であり、顧問会議は関係ない」というのがその理由でした。

一見、ちゃんと研修をしたようにも見えます。実際、そういう風に報道した新聞もありました。しかし、これはとても不誠実なやり方だと思います。なぜなら、ことの正否を顧問会議は(もう、部会長と委員長は、と言っていると思いますが)はっきりさせないという道を選んだことになるからです。そもそも『ハナコ』が差別にあたるのかどうか、あるいは差別表現とはどういうものか、十分に論じることもない学習会に何の意味があったのか。「とりあえずやりました」式の、自己正当化のための学習会だったのではないかと。

映像と脚本を解禁したのなら、差別表現ではないということですか。「ハナコ」に問題はなかつたということですか。非難がよせられるとした判断は間違っていたということですか。それならば、あらためてケーブルテレビに放映するように要請してもいいはずですよ。筋が通りません。

また、「放映しない」という残酷な処分をしたことに対して、一言くらい謝ってほしいものです。人を殴っておいて「もうだいたいだからからいいじゃない？」といて謝らない人がいたら、その人はよほど人の痛みのわからない人でしょう。

なにより大事なことは、福井農林高校演劇部の部員たちに、君たちは間違ったことはしていなかつた、としっかり伝えることだと思います。大人たちが間違っていたと認めることだと思います。そうしてはじめて、生徒たちは自信を持てる。自分たちが間違っていなかつたことを実感できる。そうして未来に向かって歩いて行ける。

最近、財務省近畿財務局の元職員・赤木俊夫さんの自殺に関連したニュースがありました。妻の雅子さんは、国に対し約1億1000万円、元理財局長・佐川宣寿氏に対し550万円の損害賠償を求めて裁判を起こしていましたが、12月15日、裁判の進め方を話し合う非公開の協議が行われ、国側は突如、「いたづらに訴訟を長引かせるのは適切ではない」として賠償金を全額支払うことを明らかにしました。これにより公文書の改ざんと俊夫さんが自殺した因果関係が明らかにされないまま、国への裁判が終わることになりました。これに対して雅子さんは次のように話したそうです。

「ふざけんな!と思います。惨敗したような、大負けしたような気持ちでいます。夫は国に殺されて、また何度となく殺されてきましたけど、今日もまたうちのめされてしまいました。金を払えば済む問題じゃない。私は夫がなぜ死んだのか、なぜ死ななければいけなかつたのかを知りたい」

解禁したからいいというものではありません。勝手に幕引きしないでほしい。問題を曖昧にして逃げないでほしい。それはずるい大人のすることです。

12日(日)

「明日のハナコ」再上演+学習会(差別表現について)開催しました。講師は小出薫弁護士。

差別表現は、その単語を使っただけで禁止されるようなものではないこと、表現の自由は基本的人権であり、よほどのことがない限り制限されてはならないものであること、「ハナコ」の場合はその「よほどのこと」にはあたらないこと、表現は外に開示されてさまざまな評価を受ける、そこまでが「表現」であり、「ハナコ」はその機会を奪われて状態にある、「ハナコ」を封印するというのは検閲にあたり、

もっともしてはいけないことであること、などを明快に小出弁護士は語ってくれました。

また、会場からも多くの共感の言葉と、「自分たちも違う現場ではあるが戦っている」という励ましの言葉ももらいました。車椅子で観劇していた障害者の方もいましたが、「この劇が差別だとは思わない」と語ってくれました。

19日(日)

「明日のハナコ」再上演+学習会(原発問題について)開催しました。講師は小出裕章氏。学習会は小出氏の原子力発電についての明快な説明に圧倒されました。原子力発電は二酸化炭素を出さないからよいというのは無意味な意見であること、放射性廃棄物は、短い命しか持ち得ない人間のスケールでは管理できないものであること、そうであればこそ「ハナコ」の排除は許されるべきではないことなどを語ってくださいました。

付け加えれば、12日も19日も、10人あまりの熱意あふれるスタッフが手伝ってくれて実現したものです。それは「ハナコ」の活動に共鳴してくれた高校演劇部の卒業生たちでした。見返りなしに信じるところのために笑顔で動ける彼らを見ると、大げさですがこの国の希望を見たような気がしました。

顧問の先生は、一人来てくれました。もちろん部長や委員長はその姿を見せませんでした。対話する窓はいつでも開いているのに。

2022年1月8日(土)

「■Ishizuchi 倉庫」(愛媛県西条市)で上演会+学習会を開催しました。

「初めは脚本から『反原発の大人が高校生を使って自らの主張をしている』感じがして少し嫌でした。高校の時、放送部で、そういう『大人に作られた高校生の主張』がよくあったので。ただ、作品を見ているうちに、『明日のハナコ』には政治的中立がきちんと残されていると思いました。原発に頼らざるを得なかった人、演劇をやめてしまった友達。主人公の女の子はとて孤独です。一個人を描いた作品としてステキだと思いました」(上演後の感想より)

1月15日(土)

「ウイングフィールド」(大阪府大阪市)で上演会+学習会を開催しました。

「部活というものが教育の一環であるならば、生徒が社会的問題に目を向け、発言、発表することを喜ぶべきではないの？ これは、福井以外の高校生が上演しただうなっていたの？ これしきの表現が問題になるなんて・・・なんて脆弱な世界に私たちは生きているんだろう。子供たちがかわいそうやん。言葉は封印するものやなくて、生かしていくものですよ」(上演後の感想より)

2月10日(木)

玉村と鈴江氏は丸岡高校で、署名(紙媒体で843筆、オンライン署名で11,006、計11,849筆)を部長と委員長に渡しました。

それから新しい要望書を渡しました。以下はその抜粋です。

『「明日のハナコ」を差別であるとしたどのような根拠が存在しているのでしょうか。また、その映像や脚本が公開された場合、非難が寄せられるとした判断にはどのような根拠があったのでしょうか。それを明確に説明してください。そして、説明できないのであれば、謝罪してください。福井農林高校演劇部に対して根拠のない、間違っただけの処分をしたのです。間違っただけをしたときには謝罪する。学校の教員はどのように生徒に求めてきたのでありませんか。そのようにして社会の秩序は守られると教えてきたのではありませんか。』

そのあと「差別と考えているのか。それには根拠があるのか」など質問をしましたが、部長たちは「わからない」「顧問会議で相談する」「生徒のことを第一に考えなければならない。いま、生徒たちは騒いでほしくないと思っている」などの答弁を繰り返すだけ。生徒のことを第一に考えているなら、そもそも福井農林高校の劇だけを排除したことはどうなのでしょう。

いつまでに回答してもらえるのか、と質問すると、「コロナ下なのでいつ顧問会議が開けるかわからない」と期限を明確にしてくれないので、「後日、いついつまでに、と連絡します。」とお願いしました。その後「高校入試の準備があるから忙しい」と私たちは25分で退出させられました。ところが、その後、立ち会った新聞記者との質疑には40分近くの時間をかけたのです。時間の観念まで都合よくねじ曲げられるようです。

2月20日(日)

中日新聞の社説に「ハナコ 君は悪くない」という題で、今回の問題が取り扱われました。「演劇部員たちと、まるで悪者扱いされた『ハナコ』には、この欄から声援を送りたいと思います。君たちは何も悪くなんかないんだよ、と」

新聞社が「社説」として取り上げてくれたことは、私たちの活動が間違っていなかったことを証明してくれるものだと思います。

2月28日(月)

顧問会議が開かれました。これは年度末に開かれる定例の会議ですが、ここでようやく『明日のハナコ』について議論されました。その内容は相変わらず非公開です。ただ、福井農林高校演劇部の生徒による直筆の手紙が紹介されたそうです。

「当事者の私達の意見を聞いて欲しいし、知って欲しいです」「たった3文字だけで、この作品が差別だと言われてしまうのはどうかと思いました」「事前にテロップで断りを入れたり、ピー音で対処できたはず、普通に放送して欲しいです」「先生方には腹は立ちませんでした、先生方の言動は上からの圧力や周りへの忖度があった結果だったのだろうと思っています」「今でも『ハナコ』のことを考えています。忘れない黒歴史ではなく、高校生活で一番濃い思い出です」「『差別だ』と、とっくにたたかれているはずなのに、現状たたかれています。農林高校にも苦情の電話はかかってきていないと聞いています。ネットのコメントも、みんな味方になってくれています。大阪や富山や東京でも『ハナコ』を演じてくれています。だから問題ないと思います」「そして叶うならば玉村先生を農林高校に戻して欲しいです」最後の言葉には涙するしかありませんが、顧問の先生の中には「こんなことを高校生が書くかしら」と疑問視する人もいたそうです。

またこれはあとからわかったことですが、この会議の直前、演劇部員の2年生全員が「『ハナコ』を放映して欲しい」という意思を顧問の先生に伝えたそうです。ただし、顧問の先生は会議の中でそのことを言わなかったため、他の先生方が知ることはありませんでした。

部員たちが勇気を持って行動したことに希望を持ちたいと思います。それに対して、自分たちに不都合な行動を黙殺する、先生方の姿勢には呆れるばかりです。

3月18日(金)

再度顧問会議が開かれました。そしてその後、『回答』が出ました。驚くべきことに、『ハナコ』について演劇部会から文書が出たのはこれが初めてです。その意味では一歩前進ですが、その内容は残念なところもたくさんあるものでした。

たとえば最初の方では「『明日のハナコ』という作品そのものが差別的だということは一切認識していない」と述べているが、読み進むと「引用の中に『カタワ』という言葉が使われ、見た人に誤解を与える危険性が完全には排除できない」と書かれている。「一切認識していない」のに「危険性が排除できない」とする論理は、常人には理解しがたいが、先生方の頭の中では成立しているらしい。

福井農林高校の劇だけ脚本や映像の閲覧が認められなかったことについて、生徒たちは「いざいざ」と苦しんだはずだが、「これまでの要望を受けた対応で、解決済みだと考えている」。確かに12月に突然「対応」して閲覧は可能になりました。しかし「自分たちの判断が間違っていた」と反省した様子はありません。「今はもう見られるんだからいいだろう」と言っているだけです。

また、ケーブルテレビでの放映を生徒たちは楽しみにしていたが、これについても「ケーブルテレビで放映するには懸念が払拭できず、結果的に生徒および保護者の放送して欲しい願いが叶えられなかった。我々は、それが表現の自由を侵害しているとは捉えていない」。しかし、「懸念が払拭でき」なかったのは演劇部会の先生方です。生徒と保護者の「願い」を叶えなかったのは先生方です。人ごとではありません。すべては先生方がしでかしたことです。それを「結果的に」と表現するのは責任逃れだと思います。

小夜子 大人なら言っちゃいけないことがあると思うんだよ。責任持たなきゃならないことがあると思うんだよ。間違っただってあるよ。それもわかるよ。でもさ、間違っていたら間違っていました、って反省するくらいのはしてほしいと思うんだよ。こどもだって謝るんだよ。

(『明日のハナコ』台本より)

この『回答』を執筆した先生は、責任をとることをしません。上位者のせいであるとか、状況のせいであるとか、仕方なかったんだとか言います。A4版6枚に及ぶこの「回答」の中に、自分たちの非を認めるような部分はほとんどありません。そして差別表現とはどういうものか、人権とは何か、表現の自由とは何か、そういう問題についてど

う考えるのか、まったく書かれていません。

むしろ攻撃的ですからあります。私達が「ネットや新聞紙上で持論を全国的に展開した手法」について謝罪しろと迫っています。迷惑をかけたから謝れ、と言っています。

しかし私達がそのような「手法」を用いなかったとしたら、どうなっていたでしょう。脚本も映像も封印されたままだったのではないのでしょうか。間違っていると思うことについて、間違っていると声を上げることが、なぜ迷惑行為になるのでしょうか。私達は顧問の先生方が下した結論について異を唱えたのであって、先生方自身を攻撃したわけではないのですが、先生方はこの二つを区別することができません。

この『回答』は、もっともらしいことを書いているように見えるけれど、実のところは自分たちは間違っていなかったということを書いていただけです。この中には、部員の書いた手紙のことも、全国各地で行われた上演会のことも、そこで私達を支持してくれた人々のことも、1万筆を超える署名のことも、まったく触れられていません。20名足らずの先生方よりもずっと多くの人々が、今回の先生方の処置は間違っていると言っているのです。けれども、先生方には人々の言葉の重さがわかりません。自分たちの狭い世界のことしかわかりません。ここに、教師という人種が持っている悲しい傲慢さが見えるような気がします。

こんなこともありました。

この『回答』を言い渡したあとで、ある顧問の先生が、突然、9月の顧問会議での「ケーブルテレビもスポンサーに原発関連企業を抱えているだろうから」「高文連も原発からお金をもらって」という発言について、「そのような発言はなかった。だから取り消して欲しい」と言って来ました。私が「あなたはその会議に出席していたのか」と尋ねると、「していました。だからそんな発言はなかったと言っているんです」と答えました。

しかし、これは嘘でした。別の先生に確認したところ、その先生は9月の顧問会議には出席していませんでした。

ただ、さらに問題なのは、この先生が嘘をついているときに、他の顧問の先生方が沈黙していたことです。顧問の先生方は、部長たちを守ることを選択したわけです。そして嘘をつくことを選択したわけです。嘘を出発点にして、福井の高校演劇にいったいどんな未来があるでしょう。

3月20日(日)

顧問の先生方は、福井農林演劇部の部員と保護者を集め、『明日のハナコ』の映像を見せた上で、ケーブルテレビで放映して欲しいかどうかのアンケートを行いました。2月に部員たちは意思表示をしたのに、再度調査をするわけで、理解に苦しみます。結果は、

放映してほしい・・・九名

してほしくない・・・四名

どちらでもよい・・・二名

判断できない・・・一名

「放映してほしくない人間が少しでもいる以上、顧問団としては、放映に向けての働きかけはしない」のだそうです。「我々は生徒の不安な気持ちにより添い、守った」のだそうです。けれども、先生方は、九人の「表現したい」という思いには寄り添いません。先生方は、生徒たちが前に進み、大人になろうとすることを願わず、弱く無力であることを願っているかのようです。

劇を作るためには何ヶ月も稽古をします。脚本を読み込む。セリフを覚える。照明や音響の機械を操作する。そして舞台に立つ。緊張する。演じる。それは「操り人形」にはできません。自分が行動し自分が責任を持つ。そうやって舞台は成立するし、そうやって「子供」たちは「大人」になっていきます。演劇は部員たちを成長させる、とてもいい機会だと思います。そのことを、当の演劇部の顧問の先生が理解していないことが、とても残念だと思います。

保護者からこんなメールをもらいました。許可を得て、ここに引用します。

「放映されるとあなたたちが被害を受ける可能性がある。先生は守ってあ

げられない。と先生から言われた時に、「守ってあげるってなんですか？

私たちが選んで演じた劇なんだから、それくらい自分達でできます」と言っ

たそうです。それを聞いた時、先生はオロオロした様子で、何も言わなか

ったそうです。」

彼ら部員たちこそが、まさしく希望であると私は思います。

<よくある質問と答え>

Q「高校演劇祭って何？」

演劇部の県大会です。福井県には13校の演劇部があって、劇を上演しました。脚本は既成のものを探してきたり、生徒が書いたり顧問の先生が書いたり、さまざまです。顧問創作は3~4本です。

顧問たちとは関係のない第三者である審査員(3人)が賞を決めます。賞は金賞・銀賞・脚本賞などがあり、金賞の学校は上位大会である「中部日本高等学校演劇大会」に出場することになります。今年は足羽高校と啓新高校が選ばれました。

「演技賞」は「ハナコ」を演じた部員に与えられた個人賞です。演劇祭全体でただ一人与えられたという、名誉な賞です。賞は審査員によって決定されます。ということは、賞を出した時点では、審査員は「明日のハナコ」を問題とは考えていなかったのだと思います。

Q「顧問会議ってなに？」

各学校の顧問の先生が集まって構成している会議のことです。演劇部のさまざまな活動はここを通して民主的に決められることになっています。

しかし、たとえば12/9の研修会が突然決まっています。その後の方針の変更(映像と脚本の部分的解禁)について、多くの顧問が知りませんでした。今年は島田部会長や小島委員長が独断で進めている部分が多いようです。

Q「脚本集ってなに？」

その年の高校演劇祭で上演された創作脚本がすべて掲載されている脚本集です。形に残して、さらにより良い脚本を作っていくために発行されています。今年は学校ごとに3冊、配布されました。

Q「スクールロイヤーは、法律家なのになぜそんな助言をしたの？」

その弁護士がどんな助言をしたのか、はっきりわかりません。10/8の顧問会議では、野村弁護士の助言が書かれた書類が顧問に配布され、そこにはいろいろ書かれてあったらしいのです。「差別用語は使用するだけで駄目」とか。でも、そのあと、それらはすべて回収されてしまいました。だから確かめようがない。うまい方法だなあと思います。証拠がなければ追求されることはありません。

ただ、そのようなやり方は、何が正しく、何が間違っていたのか、それを明確にする上では邪魔になります。また、大変無責任な行動で、弁護士どころか、まっとうな社会人のすることではないと思います。

Q「ケーブルテレビの放映にこだわってるみたいだけど、どうして？」

福井ケーブルテレビは、全上演を録画していて、12月末に放映してくれています。専門のカメラやマイクを使っているので臨場感のある映像になります。大会本部や個人でもビデオ撮影しますが比べものになりません。だから生徒たちも楽しみにしていました。特に今年は無観客上演で、家族も劇を見ることができなかったのではなおさらです。

また、福井県の中でただ一校だけ、放映しないという処分は、本当に生徒の心を傷つけるものだと思います。罪人の烙印を押すようなものだと思います。よほどの理由がないとできないことだと思いますし、処分した以上は納得できる合理的な理由を説明する責任が大人にはあると思います。

なお、12/9から解禁された映像というのは、大会本部が家庭用ビデオカメラで撮った記録映像のことです。あまりうまく写っていません。

また、後日ケーブルテレビに「福井農林高校の映像をDVDにすることはできますか」と尋ねたところ、それはできる、映像も残っているという返事でした。「それでは、福井農林高校の生徒に渡したいので、是非作ってほしい」とお願いしたところ、快諾してくださいました。

ただし、『演劇連盟と契約しているので、DVDは連盟の委員長である小島先生に渡すことになる』という返事でした。その後、DVDは小島先生に渡されたそうです。しかし、現時点で福井農林高校演劇部の生徒の手には渡っていません。あの劇を作ったのは福井農林高校演劇部ですから、その所有権は福井農林高校演劇部にあると思います。せめて自分たちのDVDを自分たちで見られるくらいのことができないようでは部員たちがあまりにかわいそうだと思います。

Q「いがみ合っていないで、当事者同士でよく話し合ったら・・・」

対話はしたいんです。こちらから顧問会議に参加させてほしいとか研修会に参加させてほしいとかお願いしましたが、なんの返事もありません。12日と19日にこちらが開催した上演会+学習会にだってどんどん来てくださればいい。私たちの上演会+学習会は参加者を限定したりはしていません。誰でも参加できます。でも残念なこと

に顧問で来てくださったのはたった一人でした。自分の目で劇を見て、その上で判断できるいい機会だったのに。

どうして来てくださらないのか、いろいろ想像はします。

たとえば無関心。福井農林高校演劇部のことなんかどうでもいい。毎日の仕事の方が大事だし、教員は忙しいんだ。

たとえば恐怖感。行けばマスコミに追い回されるかもしれない。玉村が声を荒げて怒ってくるかもしれない。そんな怖いところには行く気がしない。

たとえば罪悪感。福井農林高校演劇部にはすまないことをした。申し訳ない。玉村の顔がまっすぐ見られない。でも謝罪までするのは嫌だなあ。

たとえば権威への服従。行けば部会長が怒るかも。委員長に叱られるかも。校長室に呼び出されて叱責されて職場で居場所をなくすかも。来年度の異動でどこか遠くに飛ばされるかも。

たとえば、私たちと対話するとその内容がマスコミに漏れて非難される、それが怖い。

けれども、正しいことをしているという自覚があるのなら、その言葉に責任が持てるはずですよ。大人が正しいことをきちんと発言して、それで社会は正しくなっていく、と学校で教えていませんか。マスコミがどうこうというなら、私たちだって同じです。しかし、私たちは自分たちの言葉に責任を持っています。だから、いつでも対話には応じます。お互いに正しく意見交換をする、そういう姿勢を見せることは、次の世代のためにも必要なことだと思います。

だから、閉鎖的な討論はしません。公開できないような討論はしません。

記録を残さない顧問会議のような討論は討論ではありません。部会長と委員長、そういう一部の主だった人たちが密談して決めるようなやり方は、どこの政治家の手管であって、正しい大人のすることではありません。

Q「福井農林高校の演劇部の生徒たちは、今はどう思っているの？」

顧問の先生が演劇部の部長に「ケーブルテレビで放映しないでください」という手紙を書かせたそうです。「こういう騒ぎになって、注目を浴びてしまって怖くなった」んだそうです。でも、「こういう騒ぎ」ってなんでしょう。少なくとも、今、「明日のハナコ」を批判する意見は（「差別だ」と騒ぎ立てたスクールロイヤー以外には）どこからも聞いていません。不安になる合理的理由がありません。

合理的理由がないのに生徒が不安になるのはどういう場合か。それは、周りの大人が合理的でない不安に駆られていて、その不安を生徒に吹き込んでいる場合です。怖いぞ、大変なことになるわよ、君たちのことを考えて言ってるんだよ、ここは慎重に行動した方がいいよ、そんなことを言う大人がいるからです。子供たちを狭い枠に押し込めようとする大人たちがいるからです。この中にいたら安全だぞ、と。

実際、一人の部員が12/12の上演会を見に行こうとしました。本人に聞いたのですが、そのことを顧問に告げると、すぐに親が呼び出され、親と本人は顧問と校長先生から1時間以上、「上演会に参加しないように」と説得されたそうです。上演会にはマスコミが来ているだろう、もし取材とかされたときにキミはちゃんと対応できるかい。キミのせいでネットが炎上したら演劇部員や学校に迷惑がかかるんだよ。親はもちろん説得され、この生徒は上演会に行くことを断念しました。

はたしてそんなふうに生徒に不安を吹き込む権利が大人たちにあったのだろうか。大人は「子供たちを守る」と称して、彼らの翼を簡単にもぎ取ります。

しかしこの生徒は悩んだあげく、12/19の2回目の上演会に行くことを決断します。このときもそれを顧問に伝えると再び行かないように説得されました。けれど、この生徒は劇を見て学習会にも参加します。別にマスコミの取材もみくちやにされたりはしませんでした。新聞記者はそこまで礼儀知らずではありません。ネットも炎上していません。

また、別の部員の一人は12/12の上演会を見に来てくれました。そして喜んでくれました。

他の高校の演劇部員ですが12と19と二回とも参加してくれた例もあります。この生徒は会場の設置や撤去にも力を貸してくれました。参加してよかった、と感想に書いてくれました。

本当は若者たちは、ちっぽけな大人たちが思うよりずっと頼もしい。彼らが自信を持って生きていくために、大人たちはよい手本にならなければいけないと思います。

なお、福井農林高校演劇部には、今年(2022年)度、少人数ではありますが、新入部員が入ったそうです。

Q「今、『ハナコ』の活動はどうなっているの？」

日本の各地でいろいろな方が『明日のハナコ』を上演してくださっています。石川、新潟、大阪、東京、神奈川など。以降は、長野、愛知、沖縄と続く予定です。本当にありがたいと思います。また、賛同してくださる方がいるということが、私達や福井農林高校演劇部の部員たちに対する何よりの励ましになります。

この活動を通じて見えてきたことは、差別表現の問題はほんの表層であるということです。知識が足りないということなら、学習すれば済みます。しかし情報の隠蔽や忖度はもっと奥の深い、人間としての生き方や、民主主義の問題です。また、福井県や原発だけに限る問題ではなく、世界全体に関わる普遍的な問題だと思います。

たとえば昨年10月、道立帯広柏葉高校新聞局が行った衆院選アンケートが同校の校長によってシュレッダーにかけられる、という事件が起きています。生徒たちの努力の成果が一方向的に無くなったのです。「アンケートが騒ぎになれば、生徒が批判される。生徒を守るのが校長の責任だと思った」と校長は語ったそうです。どこかで聞いたような言葉です。

私達は全国の『ハナコ』と手をつないでいきたいと考えています。



「オフィスプロジェクトM」による公演(3/16・東京)

——（※）実行委員会より

私たち実行委員会は十分な記録をもとに、この文章を執筆しております。